

ケアホームの世話人としての元同僚に、ただただ感服

先日、県北のある障害者相談支援センターから声がかかり、「きょうだい支援～きょうだいの気持ち、支援者としてできること～」をテーマに講話してきた。

聴講の方々の中に、元同僚の看護師さんで、今は知的障害者のケアホーム（旧：グループホーム）の管理世話人をしている方が、「顔が見たかった！」とわざわざ聴講に来て下さっていて、講話の後お誘いもありそのケアホームを見学させていただいた。

障害者用ケアホームは民間の家屋等を借り上げての実施が多いが、このケアホームは田畑の中に点在する村落の中にあり、ご実家の広い敷地内の一角に知的障害者5名（女性）用にわざわざ建てた居住家屋で、日中は入居者は通所作業所等に行くので、主に朝夕の食事等の世話と、入居者個人個人の金銭管理等の支援もしているとか。

また、実家の畑で色んな野菜を作り、食材費をいただくことなく時々食材に提供したり、休日には入居者を車に乗せて町での買い物にも付き合っているよう。

（帰りにお土産に、手作りのたくさんの野菜をいただきちゃった、(^_^)）

ケアホームの世話人は必要時間帯への出勤形態が多いのに、元同僚は家屋の管理兼世話人として同じ屋根の下で同居しているので、契約時間帯以外でも気遣い、気苦労が多いだろうことは容易に想像できる。

周りに昔なじみが多い元同僚の実家でのケアホームということもあろうが、入居者にも村落の会合への声がかかり、もちろん村落の行事には参加し、休日等の入居者のそれぞれの散歩でも、「お茶っこでも、飲んでけ！」と声をかけて招き入れてくれる農家の方も多いたか。

「地域で共に生きるとは、単に地域の福祉資源を利用するだけではなく、地域の人々との繋がりこそが目標となる」と思っているだけに、入居者の村落に溶け込んでいる様子を聞き、その実践例を見せられた気がした。

もうそれなりの年齢なのに仙台のご家族とは遠く離れて単身赴任の形で、しかも看護師としではなく、気負いもなく直向きに世話人としての日々の支援の様子をお聞きし、ただただ敬服するのみ。

元同僚の活躍に比べ、リタイヤ後は口ばかりの自分は、どこか穴に入りたい…<(_ _)>